

愛・地球博でのミティゲーションの取組



ミティゲーションによって残された海上の森

平成 17(2005)年に「自然の叡智」をテーマに開催され、累計約 2,200 万人が訪れた愛・地球博では、開発の際に自然への影響を回避したり緩和する「ミティゲーション」の取組が先進的に行われました。

平成 6(1994)年にまとめられた当初の構想では、瀬戸市南東部を会場候補地とし、その中心地にある「海上の森」を大幅に造成する計画でした。しかし、「海上の森」は、樹林や水田、湿地など多様な環境が入り組んだ里山で、生物多様性の高い地域だったことから、施行前の環境影響評価法(平成 11 年 6 月施行)の趣旨を先取りし、情報公開や関係者からの意見聴取をふまえ、環境への影響を回避・低減する対策がとられました。

その結果、約 650ha を造成する予定だった海上の森のほとんどを保全し、土地の改変面積を約 15ha に減らす計画に変更されました。さらに、残った環境への影響に対する代償措置として絶滅危惧種の保全対策などが実施されました。ダルマガエルの保全対策として駐車場の予定地だった水田約 2.8ha を保全するとともに、整備予定地に生息する個体を保護区へと移動しました。また、カヤネズミの生息場所としてカヤ場の創出や、オオタカのエサとなる小鳥の生息環境の改善のための間伐や下草刈りなどの森林管理、ハッチョウトンボの生息場所である湧水湿地の保全などが行われました。